

遊びうたについての一考察

－ 未就園児の遊びの会での事例を通して －

鶴間 順子*・杉山 弘子*

Research on Children's Game Songs

－ Some Cases in The Play Group of Pre-kindergartens －

Junko Tsuruma, Hiroko Sugiyama

筆者らは、2000年度および2001年度、幼稚園の未就園児の遊びの会で遊びうたの実践を行った。本研究の目的は、そこでの子どもたちの姿を分析することにより、「子どもにとって、遊びうたの楽しさはどこにあるのか」と「子どもが遊びうたを楽しむための環境づくり」の2点を考察することである。観察事例の検討から、遊びうたの楽しさは、子ども同士がつながり、共感し合えるところにあると言える。また、遊びうたには作り替えたり発展させたりできる自由さがあり、それが子どもにも可能なところに楽しさがあると考えられる。遊びうたを楽しむためには、同じ曲をくり返し遊ぶことやバリエーションが生まれやすい曲を選ぶことも大切である。子どもが理解しやすく、子どもの発想を遊びの展開に生かすことができるよう、進める速さや言葉かけを工夫する必要がある。子どもの気持ちに寄り添い、楽しさに共感していくことで、遊びへの積極的な姿勢を育んでいけると考えられる。

キーワード：遊びうた、親子、遊びの会

I 問題

「遊び歌」は「遊びを伴う歌」である。伝承的なわらべうたの他、日本の遊び歌の中には欧米諸国からのものが多いと言われる。創作遊び歌や子どもの創意によるバリエーションもあり、種類や内容は多種多様であると言う（玄田，1997）。

筆者らは、2000年度および2001年度に、尚絅女学院短期大学附属幼稚園での未就園児の遊びの会のプログラムの一つとして遊び歌を取り入れて実践した。遊びの会についてはすでに報告したところであるが、「親子が一緒に遊び、楽しい経験をする」とことと「身体を動かして遊ぶことで親と子、子ども同士、親同士の交流を深める」ことをねらいに展開された（杉山他，2002）。そこでは遊び歌を手指の動きを中心とする「手遊び」と全身を動かして遊ぶ（移動運動を含む）「遊びうた」とに分けて実践の評価を行った。遊びうたは、「歌があること、身体を動かすこと、親と一緒に活動することの楽しさの中から、他の親子と交流する姿や親から離れて行動する姿が生まれている」ことから、会のねらいからみてふさわしく、また重要な活動であったと考察されている。

しかし、前報告（杉山他，2002）での遊びうたの報告はごく一部であり、一つひとつの遊びうたのもつ面白さについても十分な考察はなされていない。本稿では、実践のいくつかをより

*女子短期大学部 保育科

詳しく記述するとともに、遊びうたの楽しさを考察する。それによって、はじめて集団での遊びを経験する子どもたちが遊びうたを楽しみと感じる要因を探っていきたい。

前述の通り、遊び歌は「遊び」を伴う「歌」である。筆者らがここで取りあげようとしている遊びうたの実践は、「歌」を伴う「遊び」と言う方がふさわしいが、「歌うこと」との関わりや「音楽的活動」としての位置づけで遊びうたを考察することもなされている。鶴間（1988）は長年にわたる保育所・幼稚園での実践的研究から、「子どもはどの子も歌うことを喜び楽しむ存在である」が、「本当にみんなが喜ぶ時はそこに喜べる必然性がある」と述べる。また、歌の指導をわらべうたから始めることで自然な流れができたと評価している。遊びうたに含まれる音楽的要素を分析することにより、遊びうたの教育的価値を特定し、幼児主体の音楽指導について示唆を得ようとする研究も報告されている（田中他、1996）。幼児の音楽表現の視点からも大事にしたいことは、遊びうたが子どもにとって楽しく主体的な活動になることである。

子どもは一人ひとりの参加の仕方の違いが認められる中で、自発的に音楽活動を始めるようになるという（鶴間、1998）。また、新沢（1996）は自作の遊びうたを集めた著作の中で、「この本に出ている遊び方はあくまでも1つの例だと思ってほしい」、「子どもたちの中からもっとおもしろい遊び方がどんどん出てくるかもしれない」と述べている。遊びうたの中には、その展開と楽しみ方が遊ぶ主体に任されているものがあると言える。河北（2001）は、「子どもが歌い、身体を動かし、約束事を守りながら1つの遊びうたを繰り返すとき、1回ごとに新たな活動や関わり合いがあり、そして発見や喜びがある。ことばや音楽、活動やルールなど、遊びうたの要素を理解し基本的な遊び方に習熟した上で、その遊びを即興的に変化させて遊ぶことは、子どもがさらに主体的に関わることになる」と言う。こうした記述から、むしろ、子どもが主体的に遊びを変化させていけるところに遊びうたの特徴があると考えられる。

以上のことをふまえ、本研究の目的は、遊びの会での活動への子どもたちの参加の仕方や楽しむ姿を分析することにより、次の2点を考察することである。

1. 子どもにとって、遊びうたの楽しさはどこにあるのか
2. 子どもが遊びうたを楽しむための環境づくり

Ⅱ 方 法

2000年度および2001年度に、尚綱女学院短期大学附属幼稚園での未就園児の親子を対象とした遊びの会で実践された遊びうたの事例を分析の対象とした。遊びの会は年間8回開催され、1回の時間は1時間である。毎回の流れは一定しており、はじめに10分ほど自由に遊んだ後、みんなで集まって遊びうたと手遊びを合わせて10分ほど行う。その後、身体を使った遊びや絵本の読み聞かせを行う。子どもの年齢は2000年度の初回を除いて1歳から4歳で、ほとんどが母親と一緒に参加している。人数は2000年度の5、6月を除き、10名前後から20名前後である。2000年度は自由参加、2001年度は20組をめぐりゆるやかな登録制をとった。園長、主任、教諭、短大教員の4ないし5名が運営にあたった。

2年間に取り組んだ遊びうたは、「握手でこんにちは」「いっせんだうかは」「お茶を飲みに来てください」「今日はどうなりました」「サークルダンス」「幸せなら手を叩こう」「ぞうさんとくもの巣」「チャパネカス」「手をつなごう」「なんだかおなかがすいたので」「ひらいたひらいた」の11種類である。その内、「今日はどうなりました」と「ぞうさんとくもの巣」は2001年度にの

み実施している。表1に各遊びうたの実施状況を示した。選曲と遊びのリードは、鶴間（音楽を専門とする短大の教員で、当時は園長を兼務）が行った。

会の終了後、取り組みの全体について反省・評価を行い、記録に残した。その他、遊びうたの担当者はその部分についての記録を作成している。

表1 遊びうたの実施状況

曲名	年度と回	2000年度								2001年度								
		1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8	
握手でこんにちは				○	○	○			○	○								
いっせんだうかは			○							○								
お茶を飲みに来てください		○	○						○								○	
今日はどなたです									○									
サークルダンス						○	○							○	○			○
幸せなら手を叩こう		○	○							○				○				
ぞうさんとくもの巣														○				○
チャパネカス		○	○			○	○	○		○		○		○			○	○
手をつなごう		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
なんだかおなかがすいたので				○									○					
ひらいたひらいた		○					○		○							○		

注)○は実施したことを示す。

Ⅲ 結果と考察

1. 観察された事例と考察

実施した11曲の内、人とのかかわりの面から見て下記の特徴をもつ5曲の事例を活動への参加の仕方および遊びを楽しむ姿に視点を置いて取り上げ、考察する。1曲目の「幸せなら手を叩こう」は、参加者それぞれが動作をすることが基本になる。2曲目の「チャパネカス」は親子の触れ合いを含むもの、3曲目の「お茶を飲みに来てください」は親子が単位となり、他の親子と触れ合うもの、4曲目の「ぞうさんとくもの巣」は子ども同士がつながり合うもの、5曲目の「手をつなごう」は参加者全員がつながって全体を意識して行うものである。

(1)「幸せなら手を叩こう」(アメリカ民謡・木村利人作詞)

1) 選曲の理由

広く知られている歌で、簡単な内容なので、すぐに身体を動かして活動できる。ジャンプなど、子どもが喜ぶ動作を取り入れて、バリエーションを楽しんでいける。

2) 観察事例

- ・2001年度第2回(2001年6月20日)では、「手を叩こう」の部分を「くるっとまわろう」「かけっこしよう」「おしりぺんぺんしよう」にすると、子どもたちがはしゃいで楽しんでいたことが記録されている。
- ・同年度第5回(2001年10月19日)には、「手を叩こう」の部分を「コチョコチョコしよう」(くすぐり)にすると笑い、「かけっこしよう」にするとキヤーキヤーと走り回る姿が観察されている。

3) 考察

子どもは走り回るなど、動くことが好きである。さまざまな動きをバリエーションに入れることで楽しんでいけることを示している。また、「おしりぺんぺんしよう」など、ユーモアのあることばと動きも楽しい気分を高めるものと考えられる。

(2) 「チャパネカス」(外国曲・作詞不詳)

1) 選曲の理由

皆で手をつないでまわって輪の中に集まったり、足ぶみをしたりと動きが楽しい。その上、親に抱っこしてもらったり、その後で高い高いの様に持ち上げて飛ばしてもらったりとスキンシップが心地よい活動が含まれているので、子どもも親も喜ぶことが予想される。動きながら親子がスキンシップをするのに最適な曲と考えられる。

2) 観察事例

・2001年度第4回(2001年9月19日)でこの遊びを行うと、子どもたちが喜んで活動して、その場の雰囲気がいっきに明るくなった。リズムカルなうたの感じに加えて、動きの楽しさも皆で味わえ、さらにスキンシップを楽しく感じた様子であった。

3) 考察

子どもの気持ちに活気を与えたいと思って取り上げた。予想した通り、曲のもつ律動感とスキンシップの要素が、遊びの楽しさに通じていたと考えられる。

(3) 「お茶を飲みに来てください」(わらべうた・役交代の遊び)

1) 選曲の理由

歌いながら円の中を1組の親子が歩いて、他の親子のところまで止まって、2組4人で手をつないで「こんにちは」と「さようなら」をする遊びである。友だちになった気持ちが生まれることが期待される。

2) 観察事例

・2000年度第8回(2001年2月21日)に行ったときには、遊びをリードする担当者の説明通り、他の親子とかかわりを持ちながら行動していた。
 ・2001年度第6回(2001年11月21日)には、全組が回れるようにした。他の遊びうたでは親に抱っこしていた子どもも含めて全員が行った。「こんにちは」のあいさつをし、2組4人が手をつないで回る。他の子どもたちも静かに待っている。

3) 考察

二つの事例とも、遊びの会後半の時期のものである。後者の事例で観察された子どもの姿も、遊びの回が重ねられてきたこの時期だからこそと考えられる。また、皆が見守る中で他の親子のところに行く役になった子どもは、はずかしそうな表情を見せることもあるが、一人ひとりが中心になることで、みんなでする場面とはまた違った嬉しさを経験できたのではないかと考えられる。

(4) 「ぞうさんとくもの巣」(外国曲・作詞不詳)

1) 選曲の理由

遊びの会への参加を重ね、参加者同士の関係が深まっていく中で、子ども同士がかかわりあって遊んでいける曲として選んだ。

2) 観察事例

・2001年度第4回(2001年9月19日)、初めてこの遊びを行った。「ひとりのぞうさん」を「いっぱいぞうさん」に替えた場面では、子どもから「いっぱいになっちゃった」ということばが聞かれた。全体的に楽しい雰囲気であった。
 ・2001年度第7回(2002年1月16日)に2回目を行った。担当者が一人の子どもを誘ってつながってもらい、うたをくり返しながら次々子どもを誘っていくと、皆がつながっ

て嬉しそうに歩く。呼ばれた子どもは嬉しそうであり、前の子どもに「つかまって」の誘いかけに応じる。まだの子どもは、自分が呼ばれるのを期待して待っている様子である。4番目に呼ばれた子どもは、「ママー」と言う。担当者が母親と一緒にと言うと、母親が前の子どもにつかまり、母親にその子どもがつかまる。その子どもも自分の後ろに他の子どもがつかまることは受け入れている。母親に負わられての参加が1組あったが、その他は子どもだけでつながって遊ぶ。子どもがスムーズに皆とつながって遊んでいる様子を見て、母親は感動しているようであった。

3) 考察

継続して参加する中で参加者同士の関係が深まり、子どもたちの活動の様子も変化していった。こうした経過を踏まえ、第7回には、この遊びを子どもたちだけでも楽しめると思い実施した。この日の参加者は10組の親子であったが、皆がつながれたことは予想以上の展開であった。担当者につながって歩く子どもたちの様子が楽しげであるため、待っている子どもにも期待感が生じ、呼ばれて列につながることを嬉しいと感じるのであろう。また、子どもだけでつながることが難しそうな場合には母親と一緒に参加できるようにしたことで、遊びがとぎれることなく、皆が参加できたのではないかと考えられる。

(5) 「手をつなごう」(中川李枝子作詞・諸井誠作曲)

1) 選曲の理由

2000年度以前の親子での遊びの会の経験から、未就園の親子が楽しく遊ぶことのできる曲の一つと予想された。また、会の流れとして自由な遊びからみんなでの活動に移行する際、全体が一つの輪になる隊形をとるが、手をつないで輪になって始めるこの遊びはみんなでの活動のオープニングにふさわしいと考えた。

2) 観察事例

・2000年度第4回(2000年9月20日)でのこの遊びの様子を以下に記す。

自由に遊んだ後で片づけを皆でしてから「皆で手をつなぐよ」と担当者が声がけをした。「手をつなごう」をしようと誘うと、子どもの表情が期待を込めた表情になり、すぐに歌いながら遊びに入った。2番の「赤い金魚ひらひら」のところになると、みんなのつくった輪の中に入って泳ぎ出す(走り回る)子どもが出てきた。他の子どももそれをまねして楽しげに走りながら泳ぎまわった。少し遠慮がちにしていた子どももあったが次々まねをしていった。子どもたちの表情は、はしゃいだ気持ちと発散した気持ちと親の表情をうかがっているような顔といろいろだった。

3) 考察

遊びの会の活動も4回目になり、子どもたちには他児に慣れてきた様子が見られる。自由に遊ぶ場面でも遊びに自発的な行動が出てきた。「手をつなごう」を始める場面では、子どもの表情にうれしさと弾んだ気持が読み取れた。回を重ねてきたことで、遊びへの期待感が生まれたのであろう。また、輪の中を泳ぐという行動が子どもから自発的に出て、次々とまねをする子どもで輪の中がいっぱいになり、今までよりも活動に盛り上がりが出てきた。子どもたちは自由な発想で行動し、これまで以上にこの遊びを楽しんでいたと考えられる。

2. 曲についての考察

親子の遊びの会であったが、子ども同士のかかわりで遊ぶ姿を見ることができた「ぞうさんとくもの巣」と、ほとんど毎回楽しんだ「手をつなごう」を取り上げて、これらの遊びうたの子どもにとっての楽しさをさらに考えてみたい。

(1)「ぞうさんとくもの巣」

昔から遊び継がれてきたものである。楽しさにつながる要因として次の点が考えられる。

- ①遊びのテンポが2歳頃の子どものに適している。
- ②象の鼻のように手をぶらぶらさせて歩くことに興味を感じる。
- ③皆と遊ぶことが楽しくなると、つながって歩くことがうれしい。
- ④皆の歩いている姿を見ると自分もつながりたいと思う。
- ⑤いつ、自分が呼んでもらえるかという期待も子どもの心をウキウキドキドキさせる。
- ⑥子ども同士の気持ちの通じ合いに喜びがある

事例に挙げた親子が一緒にいて子どもだけがつながっていくような場面では、自分をアピールするかのように母親の顔を見ながら歩く子どもの姿が見られた。親から離れ、一人で列につらなって歩く自分を誇らしく感じているようである。この場合には、大きくなった喜びを感じられることが遊びの楽しさに通じていると考えられる。

(2)「手をつなごう」

輪の中を泳ぐという子どもの自発的行動は、鶴間のこれまでの経験によればこの遊びをする時に決まって出てくるものである。これを含め、過去の実践と共通した点を取り上げてみると下記の通りである。

- ①毎回取り上げても飽きる子どもが少ない。
- ②慣れるにつれて期待感からか、うれしそうな表情が見られるようになる。
- ③何度か活動を繰り返していくと子どもは輪の中に入って泳ぎたくなる。
その時から子どもの表情にうれしさがはっきりと出てくる。
- ④はねたり泳いだりの行動にメリハリが見られてのびのびと行動していく。
- ⑤歌の持つ温かさや楽しさを感じている様子である。
- ⑥皆で手をつないで輪を作って遊びうたをするのはどの子どもも嬉しいことのように見える。
- ⑦母親の存在だけでは物足りずに子ども一人ひとりが皆で遊ぶ楽しさを共感していく。
- ⑧オープニングの活動として定着して行くのが自然に感じられる。

以上がこれまでの経験との共通点である。2000年度および2001年度の遊びの会においても1回を除き、毎回取り上げられた。この遊びが繰り返し楽しめる理由の一つには、前半部の歌の持つ温かさと実際に手をつないで輪になる嬉しさがあると考えられる。二つには、後半部の動きを表す言葉とリズムが小気味よく、「はねる」「泳ぐ(動き回る)」という幼児にとって理解しやすく、行動のレパートリーとなっている動きができることが考えられる。

IV 全体的考察

1. 子どもにとって、遊びうたの楽しさはどこにあるのか

遊びうたには、昔から伝わるわらべ歌、西洋の旋律の歌といろいろある。歌の長さ、歌詞の

内容などもさまざまである。歌そのものが子どもにとって楽しい内容であるからそこに必然的に楽しさが生まれるかと言えば、そうではないと思われる。その活動を子どもが受け入れ、遊びこみ、遊びを発展させていくとき、そこに楽しさが生まれるのだと考える。

では、子どもが受け入れやすい「遊びうた」の楽しさはどこにあるのだろうか。

遊びうたの活動で子どもたちは一人ひとり下記のような流れで遊ぶ楽しさを経験し、みんなで遊ぶ楽しさを知っていったと考えられる。

- (1) 手をつなぐ時、一緒に遊ぼうという気持ちが通じ合い、仲間と遊ぶことのできる嬉しさを感じる。
 - (2) 一人ひとり親や友だちの顔が見えて、気分が高揚する。
 - (3) 旋律の楽しさと快いリズムに心が躍動する。
 - (4) 歌のリズムに合わせて身体を動かし、回ったり跳ねたり踊ったりの動きをみんなですることで、快い共感を味わう。
 - (5) 楽しい気持ちを自分なりに表現してみたくなり、自発的行動が生まれて、その喜びを実感できる。
 - (6) 自発的行動を模倣する子どもが出てきて、一緒にその行動を発展させて楽しさを共感する。
 - (7) 親子関係を超えて子ども同士のつながりが深まり、コミュニケーションが築かれる。
- こうした中で、子どもの自発的行動が活発になっていく。

このように、子どもが遊びうたの持つ歌の温かさや楽しさを受けとめ、遊びをくり返していくうちに気持ちが解放的になり、受け入れやすい内容の動きをみんなで経験してより心を動かされ、仲間同士で楽しさを共感し合うことが、さらに自発的な行動へとつながっていった。遊びうたの楽しさは、活動を通して子ども同士がつながり、共感し合えるところにあると言える。また、遊びうたには作り替えたり発展させたりできる自由さがある。それが子どもにも可能なおもしろいところがあると考えられる。遊びうたは「歌うためのうた」ではなく「遊ぶためのうた」なのである。

2. 子どもが遊びうたを楽しむための環境づくり

遊びうたの選曲と展開上の留意点を柱にしなが、子どもたちの姿を通して子どもが遊びうたを楽しむための環境づくりについて考察していく。

選曲に際しては、次の4点に留意した。

- (1) オープニングの曲を決めて行った。同じ遊びうた（「手をつなごう」）を活動のはじめに行なうことでみんなと顔を合わせて嬉しい気持ちや、はねたり金魚になって泳いだりして楽しいという気持ちを共感していったと思われる。繰り返し行うことで、自信を持って伸び伸びと出来るようになり、気持ちが開放的になっていくのがわかった。一人ひとりの表情がよかった。
- (2) 子どもも親も知っているだろうと思われる曲を選ぶようにした。「知っているよ」というような得意げな様子が見られた。活動の盛り上がりには効果があったと思う。
- (3) 新しい曲だけの組み合わせにならないようにした。それは子どもの気持ちに負担になるからである。また、前から知っている歌や前回に歌ったうたにはなじみがあって楽しさを共感することができる。
- (4) バリエーションが生まれやすい曲を選んだ。後半の頃には、遊びの展開について自分

の考えを言い、子どもたちから活動を発展させていくようにもなった。

次に、主に活動の展開上留意した点に則して考察していく。

- (1) 大人と子どもと一緒に遊びうたを楽しむ活動の展開にあたっては、子どもに焦点を当てて行うことが第一である。まず、子ども自身が活動に参加したくなるような雰囲気を作り、自然に慣れていく様子を観察しながら誘っていくとどの子どもも活動に参加できるようになる。楽しそうであれば必ず入ってきて、活動の最後には満面の笑顔が見られる。
- (2) 子どもの自由な発想が生まれる環境として、子どもの発語を受け止めることを大事にした。どのような発語でも子どもの気持ちを汲み取り、みんなに返していったり、ほめたりすることで、能動的に参加できる雰囲気が作られていく。
- (3) そのためにもこの時期の子どもの活動はゆっくりと進め、子どもが理解できるよう留意した。活動と活動の合間に、子どもの気持ちを受け入れる言葉かけや、次の活動に期待を持たせるような声がけを行う。やさしい声がけ、わかりやすい言葉かけはもちろん、温かい雰囲気で行うことも大切である。
- (4) 回を重ね、様子を見ながら、子どもたちが母親と離れて、子ども同士が手をつなげるよう働きかけていった。子どもたちは回を重ねると次第に活動や担当者の働きかけを受け入れやすくなるので、無理をせずに進めた。
- (5) はじめはぎこちなかった親たちも遊びうたを楽しいと感じた様子で、子どもと一緒に楽しめるようになっていった。子どもの喜ぶ姿や、自分から離れて子ども同士で友達になっていく姿を見ることは親にとって嬉しいことである。子どもの成長を確かに感じられるこの時間を大切にしていけることで、親同士もつながっていった。

以上のように、選曲との関連では、子どもは同じ曲をくり返し遊ぶことで、自信をもって行動し、楽しさを共感し、そこから自発的な行動が生まれやすくなると考えられる。予め、バリエーションが生まれやすい曲を準備することも大切である。

遊びの展開に際しては、大人が笑顔で楽しい気持ちで活動を進め、子どもの気持ちを広く受け入れていくことで参加しやすい雰囲気ができていく。子どもが理解しやすいように、また、子どもの発想を受け止めて遊びの展開に生かしていくことができるように、進める速さを加減し、言葉かけを工夫する必要がある。そして、子どもの気持ちに寄り添い、子どもの楽しさに共感していくことが大切である。子どもの気持ちに寄り添って展開していくと、活動は子どものものになっていく。子どもの心を高揚させ、遊びへの積極的な姿勢を育てていけると考えられる。

V 引用文献

- 1) 河北邦子 (2001) 遊びうたの即興性. 吉富功修 (編著) 音楽科重要用語 300 の基礎知識, 明治図書, 272
- 2) 玄田初榮: 岡田正章他編著 現代保育用語辞典, フレーベル館, 1997, 15
- 3) 新沢としひこ: 新沢としひこのあそびうた だいすき! 鈴木出版, 1996, 5
- 4) 杉山弘子・鶴間順子・坂本由佳里・斎藤亜紀: 幼稚園における子育て支援についての一考察 - 未就園児の遊びの会の実践を通して - 尚綱女学院短期大学研究報告, 第 49 集,

2002, 31-43

- 5) 田中喬子・井戸和秀：遊びうたに見られる音楽的要素の研究 日本保育学会第49回大会研究論文集
- 6) 鶴間順子：保育所・幼稚園における音楽指導法の研究－昭和53年から62年までの実践のまとめ－ 尚絅女学院短期大学研究報告, 第35集, 1988, 139-148
- 7) 鶴間順子：乳幼児期の音楽活動のありかたに関する研究－未就園児親子の音楽あそび「なかよし広場」の実践結果から－ 日本保育学会第51回大会研究論文集, 1998, 754-755

